西照

西照寺寺報「さいしょう」 第 34 号
2015 年 10 月 27 日
発行　浄土真宗本願寺派　西照寺
高岡市吉久２丁目４－40
郵便振替口座　00780-8-8185　西照寺
西照寺ホームページ　http://nisitera.eek.jp

報恩講勤修

左記のとおり今年度の報恩講お勤めいたします
お参りくださいませ

時間

十一月十五日（日）午後二時（逮夜）～
午後七時（初夜）～
十六日（月）午前九時半（満日中）～

布教使　小島信師　射水市堀岡　聞光寺衆徒

※お斎（御膳）は　十五日逮夜のみで十六日はありません

西谷山西照寺

苦悩からの解放

お釈迦さま（釋尊）は「人生は苦なり」と教えてくださいました。自分の思い通りにならないと「苦」を感じますから、言葉を換えれば、「苦なり」とは、人生は「自分の思い通りにはならない」ということを言われているのではないかと思います。

私でしたら、寺に生まれようと思ったのでもないのに、生まれてみたら、寺の息子であった。「生」は自分では選べません。それではと、せっかく人間として生まれたのだから、いつまでも若くて健康で長生きがしたい。そう思っても、自分の思いとは関係なく、やがて年を取り病気になって、死にたくもないのに死んでいかなくてはなりません。人間として生まれたということは、人生は自分の思い通りにはならないという、根本的な苦悩を背負って生きていかねばならないということです。

確かに、人生には楽しい時や幸福を感じる時もあります。しかし、その時においても根本的な苦悩は解決されたとは言えず、ただ忘れているだけかもしれません。また、「諸行無常」は厳然とした真実ですから、楽しさや幸福は必ず壊れていくようになっています。今あるものが無くなっていく、そこに不安や苦悩を感じるのも事実です。大無量寿経には『田あれば田に憂へ、宅あれば宅に憂ふ。〈中略〉田なければ、また憂へて田あらんことを欲ふ。宅なければまた憂へて宅あらんことを欲ふ』と、田や家が有れば、どうやって維持しよう、無くしては大変だと憂い悩む。また、田や家が無ければ、何とかしてほしいと憂い悩む。有っても無くても苦悩する、私たちの生活のあり様を言い当ててくださっています。

実は、私たちは楽しい時も幸福を感じる時も、根本的な苦悩の構造からは、解放されていないということになるではないでしょうか。

それでは、なぜ苦悩から解放されないのか。

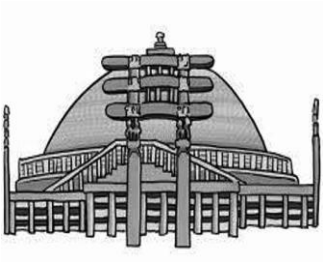
釋尊は、その原因は自己中心的な執われ、自分にとって都合の良いものに執着する心（煩悩）だと見抜いてくださいました。「諸行無常」ということは、永遠に変わらない常住の実体というものはない。あらゆるものは生滅変化を繰り返すという不変の真実です。いつまでも変わらない私というものはありません。ですが、私たちは「若くて、健康で、長生きする」ことが、素晴らしいことで幸せなことだという自分に都合の良いあり方に、執われてしか生きることができません。私の願いや夢も、殆んど「我執」（煩悩）の上に成り立っているのではないかでしょうか。

そうすると、私の与えられた命の事実は、「年を取り、病気になっ

て、死んでいく」という私の思いとは全く逆の現実です。私の願いや生きる意味が、我執（煩悩）から出ている限り、命の現実によって必ず裏切られることになります。苦しみや空しさから逃れることはできません。

釈尊は、そういう私たちに、苦悩の原因を明らかにしてそれから解放される、さとりと安らぎに至る道を明らかにしてくださいました。

さて、釈尊滅後です。在家信者にとって、釈尊の教えは、理屈としては理解できても、出家して僧侶となり実践することは不可能に近いことでした。煩悩の執われから逃れられない私たちにさとりに到る道などあるのか。どのように生きればよいというのか。



いや、在家信者のまま、救われていく道、さとりに到る道があることを説かれていかれたはずである。そこにこそ釈尊成仏の目的があったのではなかろうか。

そういう圧倒的多数の在家信者の、仏道を求めていこうという歩みの中から、釈尊が残された教えの再構築がはじまり、大乗仏教は生まれてきたのではないかと思います。

その生き方のモデルになったのはやはり釈尊でした。この世で我執（煩悩）から解放されさとりを開かれたのは、歴史上ただ一人釈尊です。その釈尊は、さとりをひらいた後、どのように生きられたのか。

それは、自分のために生きられたのではありません。生涯を通じて悩める人を救い続けて、他者のために生きられた人生でした。つまり、悟りをひらくという「自利」（智慧）は、同時に他者を救い、他者のために生きるという「利他」（慈悲）と一つではないのか。むしろ、他者のために生きるということは、自らさとりをひらくということの中味である。

釈尊の生きざまから再確認された大乗仏教のさとりの境地は、自利利他の完成、他者のために慈悲利他に生きるということでした。

また、釈尊滅後在家信者を中心に、釈尊の前生の物語（ジャータカ物語）がつくられていきます。釈尊在世当時は、すでに輪廻転生、因果応報という考えは社会に浸透していました。この思想は、身分差別であるカースト制度を支えていて、釈尊はそれからの解放を説かれたのでした。ですから、僧侶集団が積極的に関わったとは考えづらく、おそらく在家集団中心の作業ではなかったかと思われます。

この世でさとりを開かれた釈尊は、さぞかし前世で善行を積み重ねて来られたに違いない。

〈裏面へつづく〉

〈中面から続く〉　そういう善因の積み重ねが、この世でさとりという楽果を生んだのであると。

現存するパーリ仏典には、五四七の前世物語（ジャータカ物語）が残されています。それによると、釈尊は九一劫年前、スメーダという苦行者でありました。ある時、ディーパンカラという仏（燃灯仏）に出遇い深く感動して、「世の人々を救う仏となろう」と誓願を起こし、菩薩としての修行をはじめます。菩薩とは、菩提薩埵の略語です。他者の救済を願い、自利利他の完成であるさとり（菩提）を求めて修行する人々（薩埵）という意味です。釈尊のさとりを求めて歩む前世の姿が菩薩と表現されました。

このスメーダ青年の姿を見たディーパンカラ仏は、「汝は遥か未来に釈迦如来という仏となる。そのため九一劫という年月、五百十数回生まれ変わって菩薩の修行をせねばならぬ」と、必ず仏になるという保証の予言である「授記」というものを授けられます。その授記の通りスメーダは五五〇回生まれ変わり、菩薩の善行を積んで、今世において釈迦如来という仏となったと説かれています。

その菩薩行を書かれたジャータカ物語には、時には動物に生まれ変わり、他者の救済のために、慈悲行や布施行を実践していく。他者のために自らの命を捨てていく「捨身」の話が、綿々と語られています。

他者のために生きるという菩薩行の繰り返しの中に釈尊のさとりの完成があり、その生き様は、必ず仏になる道であるとディーパンカラ仏は授記を与えているのです。

このように釈尊前世物語の作成や、更には釈尊を讃歎する作業も同時に進められていきます。最終的には、釈尊とその教えの永遠性と普遍性を讃歎することが最高のものとなります。釈尊こそ「無量寿・無量光」であるというのです。大乗仏教には沢山の諸仏（諸々の仏方）が登場してきますが、釈尊のさとりも諸仏のさとりも同じはずですから、釈尊も含めて諸仏は皆「無量寿・無量光」になります。この無量寿（アミターユス）・無量光（アミターバ）が合わさった言葉が阿弥陀です。諸仏に共通する「「無量寿・無量光」を自らの名乗りとして阿弥陀如来は登場してきたのでした。そこに大乗仏教が凝縮され、集約された精神があるように思えます。

大乗仏教は、自我の執らわれに気づきながら、自他は一如であるという阿弥陀に集約されるような「智慧」のうながしを受け続けていく。そして、他者のために生きようとする「慈悲」のところに、さとりへの道は必ず開かれていくことを教えているように思います。

苦悩から解放されるということは、どんな苦悩もいとわない何ものか、精神を見出すことです。大乗仏教は、そのことを指示してくれています。

（文責　住職）